

宮谷理香

ピアニスト

19歳だった宮谷理香さんがザルツブルクの夏期アカデミーに行っていた頃、故、小澤征爾氏がザルツブルク音楽祭でオペラを指揮するため滞在していた。友人たちと訪れた中華レストランに小澤氏が来店。普通ではとても話しかけられないが、宮谷さんと小澤氏は桐朋学園の同窓という間柄。思いきって声をかけると喜んでくれた。そしてアカデミーを受講していること、残念ながら音楽祭のチケットが取れないことを伝えると、なんと初日の公演前に行うリハーサルであるゲネプロに、自分の生徒という名目で招待してくれた。

世界最高峰のオペラで、しかも出来上がった舞台ではなく演出家が駄目出しや、先生が全身全霊でタクトを振る様子を間近に見せていただいた。見ず知らずの若者たちの背中をそこまで押してくださるとは。「音楽家としてのリスpektはもちろん、小澤先生の懐の深さに感服しました」

後進の指導も多い宮谷さん。偉大なマエストロが惜しみなく与えてくれたように、次の世代に自身のすべてを捧げ、尽くしたいと考えている。

撮影◎戸川寛

音楽が、聴く人の能動的な感情や精神を目覚めさせ、人生を揺さぶるような体験となるように心を尽くし、思いを尽くす

作曲家シヨパンの祖国ポーランドの首都ワルシャワで5年に1度開催されている、フレデリック・シヨパン国際ピアノコンクール。1995年のコンクールで無名の新人だった宮谷理香さんが第5位に入賞し、一躍注目を集めることになった。以後、シヨパンを重要な柱として音楽活動を続けており、知的で色彩感豊かな演奏には定評がある。また音楽を通じた社会活動にも長年取り組んでいる。誰もが認める実力派ピアニストは、ご自分の中で音楽をどう位置付け、どんな演奏を目指しているのか。宮谷さんに率直な思いを伺った。

小学2年で始まった専門教育 中学生からピアノがメインに

伊藤 宮谷理香さんというと、シヨパン演奏の第一人者として広く知られています。まずはピアノスト、宮谷さんの今日までの道のりからお話を伺えますでしょうか。

宮谷 母が私をクラシックバレエのバレリーナにしたいと、3歳から東京の橘バレエ学校に週3回通わせました。当時は金沢に家がありましたが父の転勤で上京してからです。そのレッスンで、3回に1回はピアノを弾く先生が来てくださって、私は踊りながらピアノに興味を持ったみたいですね。その頃、ママ友の中にピアノを習わせる人がいらして、それで母もほかの何人かのお友だちと一緒に

いろいろなピアノ教室を回って見学したそうです。やがて熱心で人間性が豊かな先生にお会いできたことから、週に2回ピアノを習うようになりました。それが5歳の時のことです。

伊藤 お母さまは先生を選ぶことに対して、強い思いがあたりだったのですか。

宮谷 自分がピアノを分らないので、良い先生に導いていただこうと考えていたのだと思います。